

「東京新聞」の「平和の俳句」2月の掲載分から、今回は高齢者の句を紹介し、感想を書き加えたい。年を重ねると、多くの悲しみを経験しているから見えてくるものがある。

「原発禍子孫へ回し飽食す 近吉三男（100歳）」<いとうせいこう しかも子々孫々なのだ。人間が想像し得ぬ時間を支配するなかれ。> <金子兜太 百歳の近吉さん、原発の事故を子孫回しにするずるさを怒る怒る。> 福島原発事故の原因も解明できず、廃炉までの道筋も全くついていないのに、再稼働を始めた。原子力規制委員会は、高浜原発の運転期間満了を迎えた1、2号機を新規規制基準に適合すると了承した。原発行政は福島事故がなかったかのように進めている。核のゴミは出続ける。近吉氏は、今の飽食(経済)を満たすより、子孫に禍根を残すなど怒っている。この怒りを国中で満たしたい。

「平和とは朝が来ることほんとだよ 神道美知子（91歳）」<いとうせいこう 朝が来るとは、私が生きているということ。そのうれしさを大先輩が告げる。> <金子兜太 「ほんとだよ」と無邪気に言い切れる神道さんは九十一歳。響きますなあ。> 朝、起きてカーテンを開けると、養護学校の体育館の屋根の上から朝日が昇るのが見える。反対側のカーテンを開けると、朝日に映えた「赤富士」が見える。神道さんと同じように平和を実感する。この平和を奪われてはならない。「九条の会」のメンバーと共に声を上げ続けたい。

「柿すだれ平和の息吹(いぶ)き頬撫(な)でる 羽佐田敏明（86歳）」<金子兜太 干し柿を大事に作り上げている人です。柿すだれを過ぎる風の快さよ。> <いとうせいこう これはいかにも平和の俳句。安穏とした境地を、四季に感ずる。> 箱根に行った時、妻は柿を買い、干し柿にした。干し柿を吊るした風景は子どもの頃の田舎を思い出す。秋の風が吹いて、頬を撫でる。気持ちがいいだろう。この気分を皆で分かち合いたい。

「むかし父英語かくした治安法 竹内昭子（85歳）」<金子兜太 高齢の作者は敗戦まで父が英語を話せることを知らなかった。治安維持法に抑えられていたのだ。そんな日本に戻したくない。> 戦時中は敵性語の英語を使うことが許されなかった。神学生時代に、哲学の教授が、これから日本語が世界の通用語になるから英語は勉強しなくていいと言われたと聞き、驚いたことがあった。現在は英語が通用語になっているようだが、自国語で話すのを聞くと、ホッとする。多様な言語でいい。その内、どの国の言葉も翻訳してくれる機械ができるのではないか。

「遺骨無き墓るいるいと霧の中 山崎義盛（83歳）」<金子兜太 悲惨無謀な戦争から七十年たった今の平和を徹底していたわれ。> <いとうせいこう 実際の光景から来る句とのことだが、それは抽象的な原風景でもある。> 恐ろしい風景である。霧の中に墓は累々と立ち並んでいるが、その墓には遺骨はない。遺骨と称して帰って来たが、中には紙切れや石ころが入っていたという。遺骨はアジアの地に埋もれ、海に沈んでいる。戦争の非情さを知るべきである。

「平和とは幸(さち)ある言葉春をまつ 川崎規（81歳）」<いとうせいこう その言葉自体に、平和を呼び込む力があると感じる。未来の幸福を信じて、それを繰り返しかみしめ、口に出す。冬を乗り越える。> 81歳の川崎氏の心は若い。幸ある言葉を求め、春を待つという。平和だからこそ、若々しくいられる。体力、知力は衰えていくが、夢見る若さは保ちたいと思う。

「菊をつみ認知の夫(つま)は平和なり 森下八重子（81歳）」<いとうせいこう 夫が認知症で妄想の日常だそうだが、花を摘み、小道を散歩するという。花に触れるその時、穏やかで深遠な顔を見せるのだろう。> 老々介護に疲れ、心中する人がいると報道されている。この夫婦は二人で散歩していると、夫は少年のように道端の花を摘み、えもいわれぬ喜びの顔になるといふ。何と微笑ましい風景であろうか。夫婦の平和な日々を祈りたい。